

わが心の故郷、中国

大分県 栗原 建二郎

一 わが父、わが母

大正の末期に、父と母は朝鮮半島の京城（ソウル）で結婚した。当時、京城で弁護士をしていた叔父の紹介によるものだったとのことである。父は、学生時代に左翼思想にかぶれ、日本内地には住めなくなり、アジア各地を放浪していた。台湾で大病を患い、致し方なく帰国して療養をしていたが、小康を得たので親せきを頼って京城に渡り、新聞記者をしていた。母の両親は別府出身で、同じく京城市街で雑貨商を営んでいた。

当時、日本の若者の多くは大陸に夢をかけていたが、結婚したばかりの両親も例外ではなく、満蒙大陸で青春の血をたぎらすことを望んでいた。

満州との国境に接する街、会寧から馬車を使って

満州国内に入り、そして定住の地として選んだ場所が、吉林省の龍井市であった。どうして、当時は一寒村にしか過ぎなかったこの地を定住の地として選んだのか、今もってよく分からないが、終戦までの間ここに住み着いていたことを考えれば、よほど住み心地がよかったのだろう。初めのころは、書店の経営と新聞の販売をしていた。

二 故郷、龍井について

ここで、少しわが故郷の龍井について紹介をする。

大東亜戦争以前、すなわち戦前の日本は、朝鮮半島を植民地化してからの中国大陸への進出の拠点の一つとして、この龍井を選んだようだ。というのは、この田舎町には不似合いな日本総領事館が置かれていたからだ。その当時、満州国内にあった日本の総領事館は、奉天（瀋陽）とここ龍井だけであった。

また、眉唾物だが、かつて加藤清正が中国領とは気付かずに、この町に入って来たという風説も

あり、さらにご丁寧にも「加藤清正追思之碑」という石碑までが、小学校に建てられていた。

日韓併合によって、朝鮮独立を願う多数の青年たちが、日本官憲の目が厳しい朝鮮から、定住朝鮮人の多かった中国領のこの地に逃れ込んで住んでいた。

このような背景から、戦前から反日運動がくすぶっていて、必然的に日本人に対して厳しい目が向けられていた。当時のある百科事典に、この龍井のことが「不逞朝鮮人の巢窟」と記されていた。

小学校一、二年ごろまでの遠足には、総領事館の騎馬警官が警護についていたくらいであった。近郷にあった総領事館の警察分署が襲われることも再三であった。他民族とは孤立した日本人社会であった。満州国の独立以降は、短い期間ではあったが、割合に平穏な日々が続いた。

盆踊り大会、お寺の日曜学校、日蓮宗の寒行、相撲大会、それに頼めば朝の納豆配達、さらに町

中には、遊郭、小料理屋、すし屋、うどん屋、屋台の焼き鳥屋等々、町中の日本人社会は日本内地のそれと変わりは無かった。

一見平和な生活であったが、長くは続かなくなり、治安・社会情勢はだんだんと悪い方向に向かっていた。まず一番に、食糧事情が悪化してきて、主食が配給制となった。ここでも人種差別は歴然としていて、日本人は別枠扱いであった。

三 第二次世界大戦ぼっ発

昭和十六（一九四一）年十二月八日は、木枯らしの吹く寒い日だった。小学六年生だった私は、子供心にも大國アメリカと戦争をして勝算があるのかと、不安で頭の中がいつぱいになった。しかし緒戦の勝利で、いつの間にかその不安は消え去ってしまった。翌年の春には中学校進学を迎えた。

近くの延吉市にも、日本人中学校は開校していたがまだ知名度が低く、経済的に少し余裕のある家庭の子弟は、旅順や新京（長春）の中学校、女

学校に進学していた。兄は、既に旅順中学に在学していたので、私も旅順中学を進学先として選んでいた。そして昭和十七年四月には、兄は旅順工大に、私は旅順中学へとそれぞれの道を歩むことになった。兄の旅中時代は、寄宿舎生による同盟休校が起きるなど、まだまだ自由の気風は少しは残っていたが、私の時代には自由は望むべくも無かった。

学校には配属将校がいて、学業は軍国主義教育がすべてに先行していたし、寄宿舎生活では上級生による私的制裁が日常茶飯事であった。

二年生になると勤労奉仕、三年生になると勤労動員が始まった。食生活も日増しに悪くなってきて、大豆入りのご飯も、いつしか豆かす入りとなってきた。

気持ちの上でも、動員先での社会人との接触と周囲の状況の悪化とで、だんだんとすさんでいった。同級生の中からは、幼年学校、特別幹部候補生、予科練などを志願する人が出てきた。それぞ

れ学校に割当があつたのかどうかはよく知らないが、ある教師などは、執拗に特定の生徒に志願することを強要していた。私も打算的な考えから、どうせ兵隊になるなら、少しでも早くに行つた方が楽かと気持ちが悪いが、決心するまでには至らなかった。あれほど威勢のよかつた戦争も、年を経るに従つて暗い局面を迎えてきた。

四 学徒動員

その当時は、外地でも内地と同様に、中学生も勤労奉仕や学徒動員に狩り出されていた。動員先は大連の軍需工場や、警察が所管している対空監視哨が主な場所だった。勤労奉仕は中学一年のころから始まり、その最初が旅順の関東神宮の造営作業だった。次いで、海軍の教育施設の建設に派遣された。この建設現場の生活環境は最悪で、異常に発生した蚤の大群で夜は眠れないほど悩まされた。学生の自意識はだんだんとすさんできて、その気持ちのはけ口を、教師や同級生に向かつて求めてきた。教師に対しては食べ物に異物（主と

してふけなど)の混入、同じ仲間である同級生に對しては、理由の薄い私的制裁が横行していた。

あるとき、同じ建設現場に派遣されていた中国人学校の学生との間に、些細なことからトラブルが起きた。旅順中の同級生だった中国人学生の仲裁により、大事には至らずに解決したが、一触即発の危険な状態であったのは確かだった。

対空監視は、敵機の侵入を監視することだが、空を見張るといふよりも、派出所の警察官の巡回を見張っているといった感じであった。しかし、この対空監視の仕事は食事が自炊であったので、それなりの苦労はあったが、しばしの開放感を味わうことができた。

このころになると、まともな授業は無くなってしまう。ある日の勤務明けで、午前中に寄宿舎に帰ったときに、広島市に新型爆弾(当時は原子爆弾をそのように言っていた)が投下されて、広島市内は壊滅状態になったという新聞記事を読んだ。戦局は、日を迫って敗色濃いものとなってき

た。

五 終戦

昭和二十年八月十五日を迎えた。大陸の秋の到来は早く、その日は秋の訪れを感じさせるような日差しだった。朝から、動員先の旅順警察署では、落ち着かない雰囲気のみなぎっていたが、そのうちに正午に重大発表があるので、署の前庭に全員集合するようにと伝えられた。何事かといふかりながら集まったが、それは思いもよらない天皇陛下の玉音放送ということであった。雑音ばかり大きくて、内容はほとんど聞き取れずに、ただ頭を垂れているだけだった。後で警察の人の話で、日本は無条件降伏をしたことを知った。

わずか十七歳の少年には、無条件降伏の意味していることは十分に理解できなかったが、これで戦争が終わったのだ、家に帰れるのだ、という一種の開放感が心の底から沸き上がってきたことだけは忘れられない。

六 休校・寄宿舎解散

その日寄宿舎に戻ると、各動員先から任務を解かれて帰って来た舎生で、にぎやかになっていた。みんなの話題も、日本が負けたことや、動員先でのいろいろな出来事が主であつて、これから先は一体どうなるのか、我々の生活はどうなるのかなどのは話は、だれも口に出さなかつた。考えが及ばなかつたというよりも、口をきくことをためらっているようだつた。

翌日、学校から「取りあえず学校は休校とし、寄宿舎生は父兄の元に戻る」との指示があつた。旅順工大にいた兄に連絡をして、一人で帰ることを伝えると、兄は寂しそうな顔をしていた。その様子は今でもはつきりと目に浮かんでくる。既に成人している兄は、これから先のことを予見していたのだろう。戻れば自分にどんな危害が及ぶかも知れないということは、薄々と分かつていたのではなからうか。

七 北帰行

旅順中学の寄宿舎生は、満州全土の各地から来ていたと言つても言い過ぎではない。今になって考えれば、日本の敗戦による寄宿舎生の処置は、学校当局にとつては大きな負担だつたに違いない。父兄の元に帰すという大義名分のもとに、体のいい厄介払いであつたのだろう。

八月十八日ごろだつたと思うが、旅中に再び戻ることを信じながら、兄に思い出の詰まつたトラソクを一つ預けて、同郷の下級生二人を連れて、カバン一つで旅順の地を離れた。それからは予想もしなかつた冒険旅行が始まつたのだつた。

南下して来る日本人はいるが、北上する日本人はまれにしか会わなかつた。北上する列車に乗つたが、四平街の駅でソ連軍の侵入により列車が立ち往生して、下車させられた。ここ四平街には同級生の中島がいたので、彼の親せきを紹介されて、そこに厄介になつた。

その家庭は駅近くの満鉄の社宅で、主人は出征

して、親子二人で生活していた。結果的に、我々は用心棒代わりだったが、駅に近いことが幸いして、毎日のように駅に顔を出して、北上する列車を探し求めている。

そうこうしているうちに、ソ連軍が進駐して来た。戦車にしてもその他の兵器にしても、閑東軍に比べたら格段に良い装備を持っていた。アメリカ製のジープを見たのも、このときが初めてだった。しかし、兵隊は全く柄の悪い連中だった。数個の腕時計を腕に巻き付けて誇らしげに見せびらかして、威張り散らしている姿には辟易した。

ある日、新京行きの列車が出るとのうわさを聞きつけて駅に駆けつけると、機関車に無蓋貨車一台が連結されていた。機関士に事情を話して同乗を願った。列車は新京に向けて出発し、ほっとして、ゆっくりと周囲を見回してびっくりした。一見中国人風だが腰にモーゼル銃を隠し持っている人、日本刀をこみに包み込んで抱えている人、さらに驚いたことには、制服の憲兵まで乗っ

た。

南新京まで来ると、これから先は治安が不安なので入れないということでも下車した。一緒に乗っていた満州電々の職員が、我々の窮状を見るに見兼ねて、満州電々の社宅に案内してくれた。そこも主人が出征している家庭だった。少なくとも一歩、一歩と故郷、龍井に近くなったことには間違いなかった。しかし四囲の状況は日増しに悪くなっていた。

再び北行きの列車を求めて新京駅通いをはじめた。駅構内は騒然としていたが、駅としての機能は辛うじて保っていた。

今度は吉林行きの無蓋列車に潜り込み吉林までたどり着き、難民収容所に入った。収容されていた人に計画を話すと、「そんな無謀なことは止めた方がいい」と諭された。しかし望郷の念はますます募るばかりで、数日の駅通いで乗り慣れた一等車（無蓋貨車）で龍井へと向かったが、また敦化駅で降ろされた。しかし敦化市街は殺伐とした

霧囲気で、全裸の女性の死体が路上に放置されたままになっていた。日本人収容所を探したが見当たらない。怖くなってびくびくしながら歩いてみると、学生風の朝鮮人が近くに寄って来たので警戒したが、好意的な様子だったので日本語で話しかけていると、近くにいた中国人風の二人が近寄って来た。話を聞くと脱走日本兵と言う。息を切らしながら話をするので事情を聞くと、この数日間何も食べていないと言う。食べ物を買って求めて彼らに与え、これから一緒に行動することとなった。中学生三人、敗残兵二人という不思議な組み合せの避難民一行となった。

問題はその夜をどこで過ごすかということになり、空家になっている満鉄の社宅を利用することになった。社宅の内部は略奪で荒れ放題になっていて、もちろん人っ子一人いなかった。風呂場に五人一緒になって隠れ潜んだ。万一に備えて、入口には畳を立て掛けた。ほどなくすると疲れが出て、知らないうちにぐっすり寝込んでしまった。

夜明け近くになったころ、こつこつという足音が聞こえてきた。異様な霧囲気に皆目を覚ました。近付いて来る足音に怯えていると、自分の心臓の鼓動がむやみに大きく聞こえてきた。足音が入り口に近付き戸が開けられると、立て掛けてあった畳が倒された。そこには、中国人の驚きおのいた顔が浮かびあがった。思いも掛けず狭い風呂場に五人の男が潜んでいたのだから、驚いたのも無理ないことで、彼はびっくりして慌てふためきながら逃げ出した。密告されないかと心配しながら、夜の明けるまでその風呂場において、明るくなったら再び駅に向かった。

駅にはもう大勢の人が集まっていた。日本人は我々以外にも見当たらない。検問のソ連兵が立っているの、五人も集まっていると危険なので、三人で相談して二人の日本兵をまいて、人込みの中に紛れ込んだ。無事に改札口の検問を通過して、ホームに停車していたお決まりの無蓋貨車に乗り込んだ。汽車は懐かしい故郷、龍井方向に向

かつて走り出した。

止まったり動いたりしながら、龍井の一つ手前の、朝陽川という駅にやっとたどり着いた。町内は暴行と略奪で荒れ果てていて、居留の日本人は一カ所に集められていた。列車はこれから先は進めないという。山を一つ越せば龍井なのだが、残念だったが致し方なく下車し、歩いて山越えをする事とした。

途中、関東軍の兵舎もあったが、ソ連軍に接収されているようだった。そこを何とか通り抜ける、目の前にわが故郷、龍井の懐かしい町の姿が現れたが、遠くから眺めた限りでは町は静かで、少しも変わっていないようだった。高ぶる気持ちを抑えながら町に向かって歩いたが、市街に入る手前の海蘭川の橋の袂で監視のソ連兵に捕まり、身体検査と荷物検査を受けた。何も持っているはずはなかったが、一緒の下級生のズックの中から、ピストルの空莖きょうが出てきた。興奮して声高にわめき散らし、身ぶり手ぶりで自分は学生

であることを訴え続けて、どうかこの場を抜かすことができた。

町内は、不気味なほど静まり返っていた。ここまで一緒に行動した下級生二人に、それぞれの自宅に帰るように言って別れた。

八 我が家の有様

当時、我が家は町の中心部にあって、書籍、運動具等の店を営むと共に、新聞販売、通信員としての仕事をしていた。通りの角の薬屋を通って我が家の前に立ったが、家には鍵が掛けられていた。致し方なく塀を乗り越えて家の中に入った。空腹に耐えかねてごそごそと食べ物を探していると、隣の古田商店のおばさんがのぞき込んできた。そして、私の顔を見るなり泣き出した。家族のことを聞いたが、分からないという返事だけが返ってきた。それならばと思って、以前から親しくしていたお菓子屋の風月に電話を掛けた。何気無く掛けたのだが、不思議なことに電話は通じた。もちろんその時代の電話だから交換手を介し

てだが、通常のとおりだった。

家族は、父の友人の福山さんが経営している、龍井郊外のパン工場に避難していて無事だということを知らされた。歩いてそのパン工場に向かった。町は不気味なほど静まり返っていて、人っ子一人見掛けなかった。

工場には、「無用の者立ち入りを禁ず」という中国語で書かれた張り紙がしてあった。ソ連軍に接収された工場は、機能しているようだった。門を叩いたが応答が無い。致し方なく、思い切った塀を乗り越えて中に入った。すると、すぐに二人のソ連兵がマンドリンと称する自動小銃を構えて走り寄って来た。私は、無意識に両手を高く挙げた。物音で中国人の従業員が出て来たが、かねてからの顔見知りだったので、その場をとりなしてくれた。その中国人に家族のことを聞くと、「近くの小学校の教員官舎にいるはずだ」と教えてくれた。

急いで小高いところにある数棟の官舎に向かっ

た。するとその一軒の窓から、末の妹が顔を出していた。やっと母に会った。涙ばかりが出て言葉が何も出なかった。少し落ち着きを取り戻したころになって、母は涙ながらに敗戦からの状況を話してくれた。

九 龍井の八月十五日

職業柄、逸速く日本の敗戦を知った父は、在龍井の日本人を日本人小学校に集めて、日本が負けたことを伝えようとしたが、その場にいた憲兵に「そんなことは単なるうわさだ！」と言って、集会を中断させられたそうだ。

正しい情報が途絶えた町は、全くの無政府状態となり、共産党系の私兵がぼっこしてきて、次々と日本人を逮捕して、監禁し始めたそうだ。父もその網にかかり、数日前に共産党系武装集団とぐるになったソ連兵によって拉致されてしまった。母は、私と会う二、三日前に父に面会したようだが、そのときは既に拷問を受けていて、一人で歩ける状態では無かったとのことだが、その後のう

わさでは郊外で銃殺されたのではないかと言われている。
ていた。

それからは混乱がますますひどくなり、親しくしていた散髪屋の夫婦の自殺、龍井警察署署長一家全員の爆死、日本人小学校の爆破、進駐して来たソ連兵による婦女子の陵辱・暴行の続発、そして憲兵隊員の拳銃自決等々の悲惨事が次々と起き、町内は不安のるつぼと化してしまったということだった。

十 日本人強制収容

私が帰った日の昼過ぎに、ソ連兵が二人教員官舎に入り込んで来た。ちょうどそのとき運悪く、東山の陸軍病院の軍属の奥さんが来ていて、母たちと話し込んでいた。ソ連兵はその奥さんをつまえて離さず、我々には出て行けと脅した。致し方なく奥さんを置いて外に出ていたが、しばらくして二人のソ連兵は出て行った。すぐに部屋に戻ってみると、奥さんが見当たらない。探していると、便所から小さな声で「すみませんが、針と糸

を貸してください」と言っているのが聞こえた。何があったかは明らかである。

そのうちに、外が騒々しくなった。何事かと外を見ると、手に手に鋏や鎌、棍棒を持って駆け登って来るのが見えた。もうここも安全な場所では無いと判断して、官舎に住んでいた荒木さん、福山さん、そして我々の三家族は、市内の我が家に戻ることにした。リヤカーに手回り品を積んで、暴徒に見付からないようにして、ひやひやしながらどうか我が家にたどり着いた。

八月末ごろだったか、「日本人は自宅を出て、飛行場に集結せよ」という指示が出た。少しばかりの荷物を馬車に乗せて、我が家を後にした。飛行場と言っても、二棟の格納庫と平屋の建物が数棟あるのみの、小さな飛行場である。三家族は、格納庫の一隅に畳を敷き、ここでの難民生活が始まった。

龍井にいた日本人総勢約五千人の居住地が、飛行場にできあがった。我々を保護してくれるの

か、行動を監視するためかは知らないが、ソ連兵が常時二人ほどついてた。しかしこのソ連兵は、夜になるとみんなの寝ている所に忍び込んで来て、婦女の陵辱や、腕時計、カメラ、眼鏡などの貴重品の強奪を始めた。知り合いの医学院教授の奥さんが、拉致されて行方不明になったのもこのときである。全く対抗組織の無い日本側で、なすすべも無いままの状態だった。

そのうちに、ようやく婦女子の保護対策が考えられ、慰安所が設けられた。盾にされたのは、色町で働いていた女性たちだったが、このためか、陵辱事案は少なくなつた。貴重品などなければ品の強奪は少しは減つたが、相変わらず続いていた。夜になると、ろうそくを片手に持つて入つて来るが、その影が格納庫の壁に映し出されて、何となく不気味な感じを与えていたことが印象的であつた。

その防止対策として、「侵入者が来たら、できるだけ大声を立てて、物を叩いて大きな音を出

す」ということが決められて実行したが、これは効き目があつたのか、被害は目に見えて少なくなつてきた。

大陸の秋は短く、朝晩の冷え込みが厳しくなつてきた。格納庫生活も一カ月ぐらい経つたころのある日、厳寒期を飛行場で過ごすことは無理だと感じたのかどうかは知らないが、ソ連軍の高官が日本人を集めて、「日本人難民を、東山のミツシヨンスクールに全員集結する」という説明があつた。またまた、東山への集団移動だ。

十一 東山収容所での生活

東山のミツシヨンスクールは、有刺鉄線で囲まれていた。避難家族は教室に収容されて、共同生活が始まつた。教室内では積み重ねた布団や荷物で、各家族の境界がつくられていたので、プライバシーなどはあるはずも無い。隣の生活は丸見えだった。ここは終戦前には陸軍病院として使われていて、その名残もあつた。教室のすぐ外には、この収容所で亡くなつた方が埋葬された土饅頭

が、あちらこちらに散在していた。

今までまとまりの無かった日本人収容者による組織も、ここにきて作られて居留民会と名付けられ、よくは知らないが共産党の息がかかった人がリーダーに選ばれて、その人が引揚げまでこの東山収容所を牛耳っていた。

収容所での生活は、初めのうちは、それぞれの家が持っていた家具や衣類などの売り食いで生活だったが、それは長くは続かずに、売れる物も底をついてきた。次いでできることは働くことだった。仕事は主として八路軍関係の肉体労働だった。我が家も例外ではなかったが、働き手は私だけだった。比較的裕福に、そしてわがままに今まで過ごしていた私にとって、力仕事は大変な苦痛であったが、働かざるを得なかった。

初めての仕事は、公安局の暖房用のまき割りの仕事だった。材木を鋸でひくだけの単純な仕事だったので、二人一組になって朝から日暮れまで働いても、わずかな量の高粱コリャンの現物支給だった。

少しでも賃金の多いところと考えて、次に八路軍の自動車修理工事に移った。そこに働いていた日本人は、私と同年輩の三人と、関東軍で車両関係の仕事をしていた四人の元軍人であったが、主として車両の修理だった。たまには敗戦で分捕られた日本軍の戦車の整備に駆り出されることもあった。銭になることならと、いろいろな仕事をした。友人と組んで料理屋の離れにあった、五右衛門風呂を利用しての風呂屋。元日本軍の隠匿していた武器の摘発・回収。これは井戸等の中に隠されている小銃等を、釣瓶つるべに乗って井戸の底に降り、探し出して回収する仕事で、三十メートルぐらいの深さだった。

収容所生活は、日を追うに従ってだんだんと苛酷な状態となってきた。その最たるものは、伝染病の蔓延であった。私の末の弟も、ここで麻疹はしかにかかって短い生涯を終えてしまった。特に寒くなつてからは、発疹チフスが大流行して、毎日毎日亡くなる人があつて、葬いがなされた。土が

凍っていて、埋葬するにも掘ることが大変だった。中途半端な土饅頭が目に見えて増えてきた。特に、講堂にまともって収容されていた独身者の死亡の多いのが目立っていた。

しばらく東山収容所での生活が続いていたが、ここに八路の正規軍が進駐して来て、ここに入ることになり、収容所は接収された。今度の八路軍は服装も整っていて、規律も厳正のようで頼れる感じだった。その中には、少数ながら元日本軍人らしき人の姿も見受けられたが、その人たちは重火器の操作を担当していた。

収容所にいた我々避難民は追い出されて、再び龍井の町に移った。花街にあった料理屋、女郎屋、ホテルなどに分散して入ったが、内部はすべて荒れ放題であった。割り当てられたのは六畳ぐらゐの小部屋だったが、ここで引き揚げるまで暮らすこととなった。

十二 親日朝鮮人の逃亡

勤めていた自動車修理工場のオーナーは、親日

家の李という朝鮮人だった。母の知り合いでもあったが、ある日突然その一家は消えてしまった。親日家だったことも原因の一つではあったろうが、いずれにせよ身に及ぶ危険を感じての行動であつたろう。うわさによると、北朝鮮を越えて船で南朝鮮に入り、さらにその後カナダに移住したと聞いた。

また、旅順中学で一年先輩だった日本名の豊田という人も、ある日一家を挙げて龍井から失踪した。彼には大変世話になり、食事に誘われたり家に呼ばれたりしたものだ。その後、ソウルに逃れて亡くなるまで、映画館を経営していた。親日家の戦後も厳しいものであった。我が家の裏手にいた副市長も、人民裁判にかけられ、即決で死刑が執行されたが、彼は前職が警察官だったので、何かで恨みを持っていた者の家族が刑場に現れて、銃殺された遺体を石でめつた打ちにしているところを見た。

国共内戦も、うわさでは聞いていたが龍井では

直接に影響は無かった。しかし、小規模な戦勝祝賀パレードは、時折見られるようになった。共産党による思想教育が始められたのもこのころだった。延安から来た日本人の共産党幹部が、日本人の成人を対象に教育を行ったが、私などは年齢的にまだ対象外であった。

十三 引揚げ準備

昭和二十一年の七月ごろに、引揚げの話が具体的にになってきた。それまでに北朝鮮から三十八度線を越えて帰国を企てた人たちも少なからずいたが、大変な困難に遭って途中であきらめ、再び中国に引き返した家族、そのまま現在まで消息不明になった家族なども多い。

やっと引揚げが始まるというので、龍井地区で亡くなった人たちの遺体の火葬が始まり、野山は異臭が充満した。我が家でも弟妹をお骨にした。妹の遺体は、凍土のためかあまり変わってなく、余計に悲しみを募らせた。七十二歳の今となっては、何もできなかつた自分が情けない。今になつ

てどんなに後悔しても、当時十七歳の少年に何ができたろうか、あまりにも負担が大き過ぎ、あまりにも無力だった。

母も、夫は生死不明、子供を二人も亡くして、最もよかるべき時代の夢は無惨に壊れてしまったのだった。父については、それまでにいろいろな話が出ていたが、どれをとっても確証のあるものではなかった。わずかに同じ牢獄にいた父の友人から託された、血に染まった露語辞典のケースが唯一の遺品であった。

幸か不幸か、引揚げ第一陣に選ばれて、旧日本人小学校校門前からトラックに乗せられて出発した。国共内戦がまだ継続中だったので、交通機関は至る所で分断されていて、汽車に乗れる駅は限られていた。そこからひと山越せば、国府軍の支配地域となるという境界線にごく近い駅で、貨物列車から降ろされた。徒歩で峠を越えようとしたときに、突如武装集団に襲われて麓の部落に連れて行かれ、なげなしの金品を強奪されて釈放さ

れ、やっと国府軍の支配地域に入ったが、国府軍は見た目は整っていてスマートだったが、本性は何も変わらず、夜になると今までと同じように一人の少女を拉致陵辱した。

十四 新京―沈陽―葫蘆島

やっとのことで新京に着いた。新京は国民党の支配下に入っていたので、比較的落ち着いた状態であった。しかし、市街地は数度にわたる八路軍と国府軍との紛争のために、至る所に銃撃戦の跡を残していた。

居留民会はよく機能していて、我々に食事も支給してくれた。アメリカ軍も初めて見かけた。二世らしいアメリカ軍将校も混じっていた。ここまて来ると奥地から這々の体でたどり着いた我々と、さしたる被害も受けずにこの都会に住み続けた人たちのと生活レベルの差は、歴然としていた。もちろん我々が底辺であることに間違いはない。

新京から再び列車に乗ったが、沈陽で降ろされ

た。そこで止められて使役に出されたが、そこは偶然にも四年先輩であった張さんという人の経営する清涼飲料工場だった。

そのころになると、避難の疲れが始めて病気になる人が増えてきた。特に年配の人には随分と苦痛だったことに違いない。一週間ほど沈陽にいて、やっと最終目的地の葫蘆島に向かう列車に乗れた。沿線では引揚列車目当てに物売りの少年、少女が出ていて、列車の止まるたびに声高に食べ物を売り歩いていった。また列車の走行中には、長い竹ざおを器用に使って、外側に掛けていたなげなしの荷物を奪うという暴徒にも出くわした。

途中で何回となく列車は止まったが、その都度引揚団体の世話役が、機関士に渡すお金を集めて来た。いろいろとトラブルがあったが、どうにか無事に最終の目的地である葫蘆島に着き、収容所に収容された。

葫蘆島は、国府軍管轄というよりも既に米軍の

管理下にあった。夜になれば慰安会などが行われるというくらい自由な雰囲気にあった。引揚船が接岸するまでの数日間は久しぶりにのんびりできた。

やっと引揚船が着き、乗船した。船の名は、「摂津丸」という貨物船だった。やがて岸壁を離れたが、あまり印象に残る感傷は感じなかった。何も知らない父親の故郷に向かって、しかも父のいないままの船旅となった。

やがて船内では、リンチが始まった。敗戦後から今まで体制側に組みして居留民会を牛耳ってきた人たちが対象となっていた。

船旅は長かったので、懐かしい日本の地を踏まずに亡くなる人も出てきた。水葬で、船の汽笛は幾度となく寂しく悲しく響いていた。

上陸地点は、長崎県の南風崎港だった。発疹チフスが発生したので、船は港外に停泊させられて、消毒やら注射やらをされて、一人の菌保有者も許されなかった。疑いが無くなって、やっと上

陸が許可になった。

陸に上がると、再びDDTの消毒薬を頭から全身にかけて、真っ白になるほど散布された。

十五 埼玉から大分へ

南風崎駅からまず父の故郷の埼玉に向かった。私はもちろんのこと、母も埼玉には行ったことが無いので、不安と期待をいדיながら、父の兄である伯父の家を頼ることにしたが、やっとの思いで尋ね当てたその家では、伯父は胃がんで病床にあった。当然ながら居心地のよいはずは無い。伯父一家も、戦後のあの苦しい生活に汲々としていたのだから、無理も無いことだった。

やがて、母と弟妹は埼玉を離れることとなり、京城から大分に引き揚げていた叔母の所に移った。私はここに残って学校に行くことを考えたが、兄が大連から引き揚げて大分に戻ったことから、東京での就学をあきらめて大分に行った。

大分では、久しぶりの一家揃っての生活だった。しかし、生活程度は極貧を極めていた。職を

求めようとしても、片田舎の大分では適当な職などあるはずが無かった。そのうちに、運良く神戸の大手鉄鋼会社に就職ができて、定年まで勤めることができた。

半世紀は音も無く過ぎ去った。しかし、犠牲は大きかった。日本の誤った国策で、父、弟、そして妹を失い、追われるように惨めな姿で日本に戻った。亡き母の心労を思うと、あまりにも痛々しいことだった。

十六 一転第二の人生

神戸の会社を定年退職してから、中国との関わりを持つことになった。退職前に日中は国交を回復し、一度は訪ねてみたいと念願していた、故郷龍井に行く機会を得た。市内はすっかり変わっていたが、遊び場となっていた総領事館は幸いに残っていた。山河は変わりなかった。帽子山、耶馬溪、大砲山、海蘭川、ポプラ並木など、幼ころの懐かしい思い出が彷彿として湧いてきた。

しかし、いつもわだかまりとして残っているこ

とは、父のことだった。いつ、どこで、どんな理由で処刑されたのか知りたい。そして遺骨を日本に持ち帰りたい、ということばかりだった。旅行社主催の短期ツアー旅行では、とても調べることは無理だ。考えあぐねた末に選んだのが、日本語教師の道であった。

中国の関係機関では、「あの栗原の息子だ！」ということとで物議を醸したそうだが、希望していたわが故郷、龍井の延辺農学院外語特訓センターで、日本語教師の場を得ることができた。ある人は、「なにも親父の処刑されたところか？」と言ったが、一年間の滞在期間に、相手の古傷にも触るようで、とうとう父のことを問うことはできなかった。そして、この一年間の龍井滞在は、父に対する供養と割り切った。今となってはこれだけよかったのだと思っている。

延辺農学院で、一人の日本人に巡り合った。その人は甲部正海さんで、自分の意思で中国に残った人である。残留孤児や、残留婦人についてはい

ろいろと話題になるが、彼のような行動をとった人については、あまり騒がれない。敗戦後の厳しい時代を異境で生き抜いた、強靱な精神力の持ち主である。

彼は、敗戦時新京商業学校の四年生で、開拓団に学徒動員していたらしいが、ソ連軍の侵入、満州国崩壊と事態は急変し、十七歳の少年の判断で新京の学校に戻ろうと必死になって考えた。しかし少年の考えるほどは、迫ってくる事態は甘くなかった。あらゆる情報から遠ざけられ、国共内戦の狭間をさまよっていたが、もちろん日本人の引揚げの話など耳に入らなかった。

国共紛争が少し落ち着きを見せたころ、商業学校生だった経歴を買われて、ある銅山の会計係の職に就き、ようやく落ち着いた生活を得たのもつかの間、「会計という大事な仕事を日本人に任せるのはおかしい！」という、共産党指導部のひとりで、その職を失ってしまった。それから再び彼の流浪の人生が始まった。

やっこのことで、終焉の地もなった延辺自治州龍井市の農機具工場に就職した。そして朝鮮族の女性と結婚、長女をもうけてやっど落ち着いた生活が始まった。ある年、この地方が未曾有の干ばつで、農作物の収穫皆無という事態が起きた。人々は、中国政府の援助で辛うじて生活を維持していたが、彼は外国人ということで、奥さんがひがむほど厚遇されたということだった。

時代は変わり、日中国交が回復し、新しい時代の幕開けを迎えた。彼は請われて延辺の農学院培訓中心の日本語講師となった。彼にとつては全く未知の世界だったろうが、この地区の日本語教育の先駆者といつてもよく、その功績は結果として現れている。評判を聞いて、遠い南方からも多くの学生がこの学校に勉強に来ていたことでも明らかである。

彼は、数回日本にも来ているし、一時は帰国も考えたようだ。最初の一時帰国は、新京商業の同窓会の招きによるものだったが、年齢、日

本にいる兄弟の反対などで、彼の決心を鈍らせたようだ。誇り高き性格を満足させる仕事も無いことも一因だったろう。

亡くなる前にも、日本への帰国を強く望んでいた長女一家と一緒に来日したが、なぜか一人で中国に戻っている。彼は永住の地として日本を選ばなかった。延辺には、忘れることのできない青春の思い出がいっぱいに詰まっていたのだろう。戻って一週間も経たずに、その波瀾万丈の人生を終えた。

私が先年、彼地を訪れた際、学校近くの山麓に、中国ではあまり見掛けない立派な墓が東向きに建てられているのを知った。いろいろと悔しさはあつたろうが、愛する延辺で人生の幕を引けたことには満足しているに違いない。

十七 最後に

日本も変わった。中国も変わった。世界も変わった。そして世代も変わってきている。我々の年代もそう長くはない。中国をわが故郷と呼べる

人は減る一方だ。苦しくて、苦い経験はもうたくさんだ。

若い時代に、「今どきの若い者は……」と、よく言われたし、今の私も同じことを若い人に言っているが、これから先は、戦争を知らない若い人に将来を託さなければならぬ。我々の世代には、語り継がなければならない義務がある。アジアの孤児にならないためにも！